

は、目的変数により促進と抑制の両面を有していた。研究2では、B社の従業員168名を対象に、上記因子がストレス対処行動に及ぼす影響について検討した。対処行動（計画的対処、サポート待望、自己批判的対処、積極的協力依頼）を目的変数とし、ステップワイズ法で説明変数を選択した。その結果、こまめに身体を動かす、タイプA3因子、SOC、職場サポート、年齢が、各目的変数に有意な関連を示した。研究3では、A社の対象者について、NIOSH 職業性ストレス調査票によるストレス反応（身体反応、精神反応）と抑うつ状態自己評価尺度（Center for Epidemiologic Studies Depression Scale）による抑うつ反応それぞれに影響を及ぼす因子について重回帰分析により検討した。目的変数を各ストレス反応とし、説明変数はステップワイズ法で選択した。これらストレス反応に対しては、SOC、職場サポート、睡眠良好、規則正しい食事摂取、タイプA完璧主義、家族関係が抑制的に、タイプA敵意とワーカホリック、年齢、女性が促進的な関連を示すことが示された。

「第3章」研究4では、仕事ストレス認知からストレス反応に至るプロセスについて共分散構造分析を実施し、因子間の関連性を検討した。その結果、有意な構造モデル（図）が得られた。仕事ストレス認知とSOC、計画的対処、睡眠良好がストレス反応に直接的に影響していた。また、仕事ストレス認知には職場サポート・規則正しい食事摂取・SOCが抑制的に、タイプAは促進的に影響することが示された。計画的対処に対しては、身体活動とタイプAがむしろ促進的に影響していた。この結果から、ストレス認知を和らげ、ストレス反応を抑制するには、職場において個人や組織がSOCを踏まえた研修や教育を導入し、職場風土の改善などに取り組むことが有用であると示唆された。

「第4章」の総合考察として、計画的対処がストレス反応を抑制する結果から、ストレス認知に対し問題を明確にして冷静に過程を踏む問題解決的な対応がストレスマネジメントに有用であると示唆された。一方タイプAは、ストレス認知や対処を介してストレス反応と間接的に関連していた。また良い睡眠はストレス反応を軽減し、規則正しい食事がストレス認知を和らげ、適度な運動は対処行動を向上させることが示され、基本的な生活習慣の改善は重要な保健指導のポイントであることが裏付けられた。さらにSOCはストレス反応を抑制すると同時に、仕事ストレス認知も制御していた。SOCには困難な課題に意味を見出すレジリエンスや、矛盾も一つの問題解決と捉える力、今までの経験を活用し解決にむかう肯定感が含まれており、職域でSOC促進に注目した保健活動を導入することで、仕事ストレス認知が緩和され、ストレス反応の軽減につながると、申請者は結論づけている。

【論文審査の結果の要旨】

学位申請者の新谷奈苗氏は、現在、和洋女子大学看護学部看護学科教授として、ならびに公衆衛生看護学の専門家として数多くの学会報告や論文執筆をおこない、大学教育の現場でヘルスプロモーション、公衆衛生看護学概論などを担当して看護師教育に携わって活躍している。さらには大学以外でも、健康保険組合・保健師、日本サーモロジー学会副理事長、日本産業看護学会評議員、社会福祉法人評議員などといった要職に就いて、関連学会

および企業の就労現場においても精力的に活動している。

博士論文審査会（平成 31 年 2 月 6 日）では、新谷氏が 30 分間の博士論文の要旨についてのプレゼンテーションをした後、3 名の審査委員との間で、活発な質疑応答ならびに議論がおこなわれた。審査委員は、それぞれの専門的な観点から当該博士論文に対して質問や意見を提示し、論文中に使用されている用語の定義の明確化、調査対象者を製造業就労者に限定したことによる偏りなどが問題とされた。

しかしながら、とりわけ審査において審査委員間で共通した意見として強く出されたのは、調査のなかで使われている尺度や変数の多さ、それに伴う多数の因子抽出による煩雑さであった。確かに論文の内容の要旨に書かれているとおり、SOC（有意味感、把握可能感、処理可能感で構成される首尾一貫した肯定的感覚を有する特性）、個人属性（平均労働時間、通勤時間、経済的ゆとり）、タイプ A（ストレスや心身症、うつ状態につながると指摘されてきた性格特性）、職場や家族におけるサポートの有無、生活習慣（睡眠、食事、運動、飲酒、喫煙の状況）といった多様なストレス関連要因が質問紙調査で使われて、データ分析を通じてそれらの複雑な相互関係が考察されている。新谷氏は、これに対する応答として、多数の尺度や変数による煩雑化を認めて、これらを整理する必要性を示しつつ、自ら作成した「提案ストレスモデル」を説明した後に、データ分析を通じて役割曖昧と役割葛藤という役割ストレスの抑制に関連する SOC（首尾一貫感覚）を促進するようなストレスマネジメントをおこなうことが重要であるという知見を強調した。さらに審査委員は、新谷氏との間で、その説明に対する議論をおこない、最終協議の結果、煩雑な因子の相互関係を整理してデータ分析の結果を明瞭にすることを前提としたうえで、当該博士論文が博士号授与に値するものとする結論に至った。

また修士論文・博士論文発表会（平成 31 年 2 月 15 日）では、大学院教育の関係者（大学院生を含む）との間で、SOC の概念や手法をめぐって質疑応答がおこなわれた。新谷氏は、先の知見をふまえて的確な応答をおこなった。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。

【学力の確認の結果の要旨】

本論文の審査を通して学位申請者の学力の確認を行ったところ、博士として十分な学識を有していることが確認できた。また、外国語については本論文中に多数の英語文献を適切に引用しており、また 1 編の英語主著論文も発表している。審査の結果、十分な語学力が確認できた。以上により、本学位申請者は博士課程を修了した者と同等以上の学力を有すると判断した。